

大正四年六月二十一日第三種郵便物認可 (毎月一回二日發行)

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號五第 卷八十二第

行發日一月五年四和昭

論叢

價格の勢力説 文學博士 高田 保馬

地方税に於ける累進課税 法學博士 神戶 正雄

マルサスの恐慌論 經濟學士 谷口 吉彦

說苑

交通事業に於ける競争 經濟學博士 小島昌太郎

重農學派の自然法觀 法學士 山口正太郎

英蘭銀行の成立及び發展過程に就いて 經濟學士 一谷藤一郎

雜錄

ギリシヤの新發券銀行に就いて 經濟學士 松岡 孝兒

目的税と考慮税 經濟學士 中川與之助

ザイルグランドの新らしき經濟政策論 經濟學士 藤田 敬三

國民所得に就いて 經濟學博士 汐見 三郎

法令

絲價安定融資補償法・資源調査法・製鹽地整理ニ關スル法律

(禁轉載)

マルサスの恐慌論 (二)

谷口吉彦

- 一 マルサスに於ける人口論と經濟學との關係
- 二 マルサス經濟學に於ける恐慌論の地位……以上前號掲載
- 三 生産動態論(一般的恐慌の肯定)……以下本號掲載
- 四 分配動態論(一般的恐慌の否定)
- 五 一般的恐慌論の現實への適用
- 六 總括及び評論

三 生産動態論(一般的恐慌の肯定)

第一、『富の二大要素』——生産と分配との關係

マルサスに従へば富は『人類にとつて必要な有益な若くは好適な物^{マテリアル、オブジェクト}』である。従つて富の増進とは此の如き物の増加であり、本質的には彼れの所謂分量の増加であつて價値の増加ではない。そこでこの場合に起る問題は、第一に分量の増加は價値の比例的増加を意味するか否か、第二に之に關聯して富の分量は價値に關係なく獨立に増加されるか否かにある。第二に對するマルサ

1) T. R. Malthus; Principles of Political Economy (1820), p. 426.
2) *ibid.*, p. 28.

スの主張は、分量の増加を價値の増進に依存せしむるにある。單なる分量の増加、價値の増進を伴はざる分量の増加は、結局に於て行詰らざるを得ない。此の意味に於て價値の増加は富の増加に對する消極的動因となる。『あらゆる場合に於て……生産物の價値の永續的増加は、永續的な妨害されざる富の増進にとつて絶對的に必要であると思はれる。何となれば此の如き價値の増加なくしては、新たな勞働が活動におかれ得ないことは明らかであるから。』

富の増加と價値の増加は比例的に進行し得るか否かの第一の問題。先づ第一に價値の増加は富の比例的増加を意味するか？ 言ふまでもなく之は否定される。『富は價値の増加と比例的に増加しないことが是認される。何となれば價値の増加は、或る場合には生活の必需品、便宜品及び奢侈品の實際上の減少ある場合にも起り得るからである。』然らば反對に富の増加は價値の比例的増加を意味するか？ 分量の増進を價値の増加に依存せしむる主張は、すでに間接に此のことを否定するものなるが、彼れは更に直接に言ふ、『價値は又、富といふ名稱の下に屬するもの、單なる分量に比例して増加しない。何となれば此の分量を構成する種々の物品が、社會の欲望と資力に適合して之に適當な價値を附與するとは限らないからである。』かくして第一に價値の増加は常に必ずしも富の増加を意味せず、富の増加は常に必ずしも價値の増加を意味せざると共に、第二に價値の増加を伴はざる富の増加は永續し得ない。それ故に富の永續的増進にとつて必要な條件は、これと共に價値の増進を併行せしむるに在る。『一般に生産物の増加は、價値の増進と併行して進む。これが富の増進にとつて最も都合よき自然的な健全な事態である。』

3) *ibid.*, p. 419.4) *ibid.*, p. 339.5) *ibid.*, p. 340.6) *ibid.*, p. 426.

然るに富の分量の増加は其の生産に依存し、價値の増進は彼れに従へば分配に依存する。

『生産物の分量の増加は主として生産力に依存し、生産物の價値の増加は主として其の分配に依存する、生産と分配とは富の二大要素である。此の二つが適當な割合に結合されば、甚だしく長き期間を要せずして……其の可能なる資源の極限にまで達せしめることが出来る。然るに兩者が別々にされるか若しくは不適當な割合に結合されば、數千年の後に於ても、なほ今日地球上に散在するだけの貧弱なる富と稀薄な人口を齎すに過ぎない。』⁷⁾

茲に生産と分配との『適當な割合』を高調せる點は、マルサスの理論を通ずる一の特徴として注意すべきである。彼れは常に兩極端を斥けて其の間を探るべきことを主張する所の一種の中庸説、若くは兩極端の適當なる比例的存在を主張する所の均衡説を高調するが、此のことは後にも屢々言及する機會を有つであらう。

此の如き理論的根據に基いて、彼れの動態研究は生産論と分配論とに分れ、其の中間に介在する兩者の結帶として、『富の永續的増進を確保するための、生産力と分配手段との結合の必要に就て』論ずる。茲に『生産力』といふは後世の學者に於けるよりも寧ろ廣義に、物的及び人的の生産資源を意味する。従つて生産力の存在は何等富の存在と關係なく、『大なる生産力を有しながら比較的貧しき諸國、小なる生産力を有しながら比較的富める諸國』⁸⁾があり、問題は此の生産力を適當な刺激によつて覺醒せしめ活動せしめて、富の生産を招來せしむるにある。又マルサスに於ける『分配』は、リカアドウに於けるが如き收入の階級的分配を意味するものではなく、生産物の消費者への分配、即ち今日商品の流通若くは配給と言はるゝ所のものである。此の意味に

7) *ibid.*, p. 426.

8) *ibid.*, pp. 413-426.

9) *ibid.*, p. 347.

於ける分配、それと生産との適當な均衡を主張することは、従つて生産と消費との均衡を主張することに外ならぬ。彼れは既に原論の緒論に於て生産消費の均衡に言及する。曰く、

『若しも消費が生産を超過するならば、其の國の資本は減少せねばならぬ。そして其の國の富は、其の生産力の缺乏のために次第に減滅せねばならぬ。若しも大なる程度に生産が消費を超過するならば、消費せんとする意思の缺乏のために、蓄積及び生産の動機はなくなつて了ふ。兩極端は明白となる。其處には中利點がなければならぬこととなる(中庸説)……此點に於ては、生産力と消費意思との双方が考慮に入れられ、富の増進に對する獎勵は最大となる。』¹⁰⁾

ど。然るに生産と消費の均衡は同時に供給と需要の均衡を意味する。富の増加に伴ふ價值の下落を防ぐためには『消費さるべき物と消費者の數、欲望及び資力との間に、換言せば商品の供給と其の需要との間に適當な比例が保たねばならぬ(均衡説)。』¹¹⁾

此の如くしてマルサスに於ては富の分量に對する其の價值、生産に對する分配と消費、供給に對する需要が常に其の對立物として考へられる。此點リカアドウ其他と著しく異なる所であり、同時に恐慌に對する議論の岐るゝ所以である。

第二、生産の『三大原因』——土地の豐饒と技術の進歩。

マルサスに於ける生産動態論即ち恐慌成立説は、資本の蓄積、土地の豐饒及び技術の進歩より成ること既に一言せる所である。第一に土地の豐饒は生産力の重要な一要素を構成するものであり、富の生産を増加する可能的條件をなすことは言ふ迄もない。たゞ問題は、單なる土地の豐饒そのものが富の増進を永續せしめ得るか否かにある。そしてマルサスの結論は之を否定する。然

10) *ibid.*, p. 9.

11) *ibid.*, p. 419.

らば何故に單なる土地の豐饒は富の永續的増進に對する刺激とならぬか？ 彼れに従へば現實に於て、『廣大な極めて豐饒な國家が、其の自然的資源を十分に利用せる例は、近世に於て多く起つてゐない。然るに狭小な不饒國が、外國貿易によつて其の狭小な領土内に……莫大な富を著積した例は多くある』¹²⁾何故に此の矛盾した結果を見るかと言ふに、豐饒な國土に於ては、第一に勞働維持の能力に比して其の意欲を缺いてゐる。第二に必要品生産の容易なるに拘らず便宜品生産のために勞すること少く、奢侈よりも懶惰を好む人間性の優越せること。従つて第三に豐饒なる國土に於ける富の缺乏は、資本の缺乏によるよりも寧ろ需要の缺乏に負ふ所である。固よりかゝる國土の開發には資本を必要とすること勿論なるが、資本の増加は生産物の増加となり、市場の擴張を必要とする。それ故に『一般に資本の増加にとつて需要の必要なることは、恰も需要にとつて資本の増加の必要なると同様である』¹³⁾要するに豐饒な土地は富の増進に有利な可能的條件には相違ないが、それが現實に富の増進を齎らすためには、資本を要し、更に之を永續せしむるためには需要の存在を必要とする。従つて『一般に、土地の豐饒それだけでは、富の永久的増進に對する適當な刺激とはならない』¹⁴⁾と結論する。此の結論は即ち、需要の増加を伴はざる土地生産力の發展は、必然に生産過剰に導くことを意味する。

第二に技術の進歩即ち『勞働を節約する諸發明』¹⁵⁾は、富の永續的増進を刺激する原因となるか？ 技術の進歩は土地の豐饒と其の性質を異にし、後者が自然の恩恵として人間の意欲に關係なく存在し、従つて長き期間に亘つて其の十分な利用を見ざるこゝあるに反し、前者は人間の必要によ

12) *ibid.*, p. 376.
13) *ibid.*, p. 399.
14) *ibid.*, p. 401.
15) *ibid.*, p. 401.

つて生み出されたものであり、従つて必要の程度を超えて過剰に存在するが如きは殆んどあり得ない。併し乍ら兩者は其の性質を異にするに拘らず『同一の法則が兩者に適用される。』¹⁶⁾第一に兩者は共に富の生産を容易ならしめ其の供給力を増大する。第二に『此の供給力が適當な市場の擴張を伴ふでなければ、之を十分に利用することは出来ない。』¹⁷⁾のである。

勞働を節約する機械の發明が、勞働階級に如何なる影響を及すかの問題は、當時に於ける一の重要な問題であつた。リカアドウはその從來の見解を改めて、原論第三版（一八三二年）に於ては、『人間の勞働に代ふるに機械を以つてすることは、勞働階級の利益にとつて屢々甚だ有害であると確信する』¹⁸⁾と主張するに至つたが、之に反してマルサスの見解は極めて樂觀的である。

『機械が發明されて勞働の節約によつて前よりも安價に貨物を市場に齎らす時は、其の最も普通の結果は、其れが遙かに多數の購買者の資力内に來ることにより、其の商品の需要を増大するから、新たな機械によつて作られた貨物全體の價値は、甚しく前の價値を超過する。従つて勞働が節約されるに拘らず、より少數の代りにより、多數の勞働者が製造業に要求される。』¹⁹⁾『生産の容易は國內及び國外に於ける市場を開拓する力強き傾向を有する。それ故に多くの諸國に於ける實際の状態に於ては、機械の採用より來る永續的弊害を患ふる何等の理由もない。』²⁰⁾

即ち彼れに於ては、機械の利用と價格の下落と市場の擴大との間に一の必然的關係が豫想されてゐる。

生産方法の發展が生産物の増加を來す場合、此の増加が永久に保證され得るか否かは、一に市場の擴大に依存する。彼れの言を籍れば、此の場合の富の増加は、分配によつて價値の増加を伴

16) *ibid.*, p. 402.17) *ibid.*, p. 402.18) D. Ricardo; *Principles of Political Economy and Taxation*, Gonner's ed., (1913) p. 379. (堀氏譯本、四二四)19) T. R. Malthus; *Principles of Political Economy* (1820), p. 402.20) *ibid.*, p. 412.

はねばならぬ。それ故に彼れの樂觀には、「常にそれが富及び價値の大擴張に導くであらうといふ假設」²¹⁾がある。富と共に價値の増進するためには、常に市場の擴張を必要とする。「機械による手工労働の代位から得らるゝ莫大な利益が、生産された商品に對する市場の擴張及び消費に對する刺激の増大に依存すること、並びに此の市場の擴張及び消費の増加なくしては、其の利益は大なる程度に失はれねばならぬといふこと」²²⁾これが此の場合最も重要な點である。「土地の豊饒と同じく善き機械の發明は、莫大な生産力を與へる。併しかゝる大なる生産力は何れも……若し十分な市場の開拓と適當な消費の増加が妨げらるゝならば、之を十分に活動せしむることは出來ない」²³⁾要するに技術の進歩それだけでは、富の永續的進歩は保證されない。之に伴ふ消費の擴張と市場の擴大が存するでなければ、富の増進は結局に於て行き詰らざるを得ないこととなる。

第三、資本の蓄積。

土地の豊饒も技術の進歩も、それが現實に生産力として活動するためには、資本を必要とする。此の意味に於て資本の蓄積は富の増進を直接に刺激する原因として最も重要でなければならぬ。「富の永久的且つ永續的の増進は、資本の永續的增加なくしては起り得ないことは確かに真理である」²⁴⁾然らば其の逆は常に真理か、資本の蓄積は常に富の増加を保證し得るかどうか？

資本の蓄積とは彼れに於ても亦正當に、「資本を追加するための收入からの節約」²⁵⁾であり、資本家の生産擴張である。然らば資本家が其の利潤の一部を割いて資本を追加し生産を擴張する場合には、其處に如何なる變化が起り來るか？ 彼れに従へば第一に労働階級に關しては、其の一部

21) *ibid.*, p. 412.

22) *ibid.*, p. 412.

23) *ibid.*, pp. 412-413.

24) *ibid.*, p. 351.

25) *ibid.*, p. 351.

は、従来の不生産的勞働から生産的勞働に轉化する。が全體としての彼等の消費は、これによつて増減するものではない。第二に資本家階級に於ては、『假設によつて彼等は節約に同意し、彼等の平常の便宜品及び奢侈品を割愛して、其の收入を節約し資本に追加する』²⁶⁾から、其處には消費の減少がなければならぬ。第三に資本の追加従つて不生産的勞働の生産勞働への轉化によつて、生産物は著しく増加せねばならぬ。然らば全體として消費は減少し生産は増加する結果となる。『かゝる事情の下に於て、私は敢て問ふ、増加したる生産的勞働者によつて得られた商品の増加量は、如何にして其の購買者を發見し得ると考へらるゝか』²⁷⁾是れ即ち彼れの生産過剰説である。

此の如き生産過剰の場合には、『甚だしく價格の下落を來して、恐らく生産費以下に其の價値を下げるか、若くは少くとも節約の能力と意思とを甚だしく削減するかに至る』²⁸⁾換言せば資本の蓄積は茲にその極限に達して、其れ自身と矛盾するに至る。即ち『節約の原則は極端に進めば生産の動機を滅失させる』²⁹⁾のである。而して此の意味に於ける生産過剰は、既に述ぶる所より明らかなる如く、特殊の商品に關する部分的のものではなく、一般商品に關する一般的生産過剰である。たゞ謂ふ所の *general glut* が必ずしも *universal glut* を意味せざることは、ポウナー氏の論する如くであらう。³⁰⁾要するに「資本の蓄積、土地の豊饒及び勞働を節約する諸發明は、生産に最も有利なる三大原因である。……是等は何れも需要に關係なく供給を促進する傾向を有するから、是等が別々にしても協同するにしても、富の永續的増進に對して適當な刺激を與へること

26) *ibid.*, pp. 352-353.27) *ibid.*, p. 353.28) *ibid.*, p. 353.29) *ibid.*, p. 8.

30) J. Bonar; Malthus and his work (1924), p. 281.

はあり得ない。富の永續的増進は、たゞ商品に對する需要の永續的増進によつてのみ維持され得る。³¹⁾然らざる限り其は一般的生産過剰——一般的恐慌——に導かねばならぬ。

第四、一般的生産過剰の肯定。

單なる資本の蓄積は此の如くして一般的生産過剰に導く。彼れは此のことを主張することに依つて、リカードウ其他の恐慌否定論者と正面に衝突する。彼れは蓄積に關する論議の大部分を擧げて、此の否定論の排撃に充てる。先づ彼等否定論の主要な根據が物々交換説に出發することを指摘して言ふ。

『若干の極めて有能なる著者達によつて考へらるゝ所によれば、特定商品の供給過剰は容易にあり得るけれども、一般商品の供給過剰は有り得ないといふ。何となれば此の問題に關する彼等の見解に従へば、商品に對して交換さるゝのであるから、一半は他の一半に對して市場を提供すべく、かくて生産は需要の唯一の根源であるから、一貨物の供給過剰は單に他の或る貨物の供給不足を證するに過ぎず、従つて一般的過剰なるものは不可能であるからである。』³²⁾

然るに彼れの見る所では、物々交換説は眞理でない。商品の大部分は、彼れに従へば、商品に對して交換さるゝよりは、寧ろ勞働に對して交換される。従つて商品生産が擴張さるゝに拘らず社會的勞働に變化なき時は、商品は交換さるべき勞働に對して過剰とならざるを得ない。例へば曩の例に於て、商品の供給は資本の蓄積に比例して増加さるゝに拘らず、社會的勞働は不生産的より生産的への部分的轉化を見たに過ぎないから、其の全體には増減なく、従つて勞働對商品の交換關係は攪亂されて、供給過剰とならざるを得ない。而もそれは『正確に供給過剰(over)とい

31) *ibid.*, p. 413.

32) *ibid.*, p.

ふ名辭によつて意味さるゝ所のものであり、此の場合に於ては、其れは明らかに、**部分的ではない**。³³⁾』

物々交換論者が貨幣を捨象することに對しても亦マルサスは反對して次の如く言ふ。

『想ふに彼等は、富は貨幣から成るといふ考へに對する非難を恐れてゐるのであらう。富は貨幣から成るものでないといふことは確かに真理であるが、貨幣が富の分配に於ける最も有力な代理人であることも亦、同様に真理である。總ての交換が實際に貨幣によつて行はれてゐる國に於て、需要供給の原理や勞賃利潤の變動を説明するに當つて、依然として銅子、靴、穀物、衣類等に主として闡説せんとする人々は必ずや失敗せざるを得ない。』³⁴⁾『流通媒介物は富の分配及び産業の獎勵に對して極めて重要な役割を演ずるから、之を吾々の考慮の外におくことは、腰と吾々を誤謬に導くであらう。』³⁵⁾』

然らば否定論者の『**根本的誤謬**』は何處にあるか？ マルサスの見る所に依れば、それは第一に商品に對する彼等の見解の誤謬に基く。彼等に從へば『商品は恰も數學的數字又は算術的性質のものであるかの如く考へられ、消費者の數及び其の必要と關聯せねばならぬ所の消費物であるとは考へない。』³⁷⁾然るに商品は結局に於て消費さるべきものであり、從つて『**彼等の相互關係は變化しなくとも、社會の欲望に對する彼等の關係は……最も重要な變化を経験し得るであらう**』³⁸⁾』
第二の『**根本的誤謬**』は、彼等が『**一般的な重要な人間性の原理を考慮に入れてゐない**』³⁹⁾點にある。即ち彼等に於ては、『奢侈は常に懶惰より好まるといふこと……が承認されたものとして取入られてゐる。』⁴⁰⁾然るに現實の人間性は、マルサスに從へば『奢侈よりも懶惰を好む』⁴¹⁾ものであり、その結果として急激に増加したる奢侈品の生産は、需要の不足を惹き起さざるを得ないといふ。

33) *ibid.*, p. 354.34) T. R. Malthus; *Definitions in Political Economy* (1827), p. 60. note.35) *Principles of Political Economy* (1820), p. 361. note.36) *ibid.*, p. 355.37) *ibid.*, p. 355.

第三の「最も重大なる誤謬は、蓄積が需要を保證すると假定するにある。」⁴²⁾ 然るに蓄積は消費の節約によりて可能であり、その限り蓄積と需要とは兩立し得ない。「若しも節約の過程に於て、資本金によつて失はれた總てのものが勞働者によつて得らるゝならば、富の増進に對する妨げは、リカアドウ氏の説明する如く一時的のものに過ぎないであらう。……併し乍ら若しも收入の資本への轉化が一定の程度を超えて進むならば、生産物に對する有效需要を減することによつて、勞働階級を仕事から放り出さねばならぬ。節約の習慣を餘りに過大の程度に取入れることは、最初には最も困難な結果を伴ひ、永久的には富及び人口の顯著な衰退を伴ふであらう。」⁴³⁾

要するに否定論者の誤謬は、生産と生産、供給と供給、商品と商品との相互關係に於てのみ問題を考察し、生産に對する消費、供給に對する需要、商品に對する消費者が問題とされてゐない。「然らば敢て問ふ、若しも次の半年間、パンと水とを除いた總ての消費が中止されたとしたら、商品に對する需要はどうなつて來るか？ 何たる商品の蓄積！ 何なる販路！ 何なる奇怪の市場を此の事件が引き起すか！」⁴⁴⁾

第五、資本法則と人口法則との相似。

『利潤率及び資本の増進を支配する法則は、勞賃率及び人口の増進を支配する法則に對して、極めて驚くべき奇異な類似點を有する。』⁴⁵⁾ マルサスは此のことを隨所に述べて、資本蓄積に關する法則を闡明する。

第一に資本蓄積の極限が利潤率遞減の法則から演繹せらるゝと全く同様に、人口増加の極限は

38) ibid., p. 356.
39) ibid., p. 358.
40) ibid., p. 358.
41) ibid., p. 358.
42) ibid., p. 359.

勞賃遞減の法則から演繹される。即ち『勞働者の食物を得る困難の増すために利潤率は減退せねばならず、蓄積の増進は最後に停止せねばならぬ。……同様に勞働者の勞賃は次第に貧弱となるべく、従つて人口の増進は生活資料を得る困難の増すために、最後に停止するであらう。』⁴³⁾と。

第二に資本の過剰又は不足とは、土地又は人口に對しては、資本需要に對して言はるべきである。同様に人口の過剰又は不足とは、土地の廣袤に對しては、人口需要に對して言はるべきである。資本も人口も前の意味に於ては常に不足して過剰なることなく、たゞ後の意味に於て即ち各々の需要に對してのみ過剰を生ずることがある。而して人口が其の需要に對して過剰なる時に人口増加を奨励する(救貧法)は、人口過剰に伴ふ勞働階級の慘狀を加重するに過ぎざると同じく、資本の過剰なる時に其の蓄積を奨励するは、生産過剰に伴ふ資本家階級の困難(恐慌)を加重するに過ぎない。

第三に資本の急激なる損失に伴ふ回復の急速なることは、恰も人口の喪失後に於ける回復の速かなると類似する。急激なる喪失を回復するための切迫した需要は、資本に於ては高き利潤となつて表れ、人口に於ては高き勞賃となつて表れ、資本及び人口の迅速なる回復を實現する。併し乍ら此のことから推して、『人口の減少が豫め無くとも同様の増加率が起るであらうと想像するならば、其は大なる誤謬であると同じく、資本の損失が豫め無くとも同様の迅速を以つて資本は蓄積されるであらうと想像するならば、これ亦同様に大きな誤謬である。』⁴⁷⁾

第四に人口増加に對する勞賃の關係は、資本蓄積に對する利潤の關係と相似する。人口増加は

43) *ibid.*, p. 369.
44) *ibid.*, p. 374. note.
45) *ibid.*, p. 370.
46) *ibid.*, p. 370.
47) *ibid.*, p. 374.

勞賃を低下せしめ、勞賃低下が一定の程度を超える時は人口は減少する。此の時勞働階級は悲惨な境遇にある。然るに人口の減少が一定の程度を超える時は、勞賃を高めて再び人口の増加に導く。此の時彼等の状態は緩和される。かくして人口法則は勞働階級の運命に關する自然法則であり、彼等は生活資料の水平線を規準として其の上下に動搖を繰返す。之と同じく資本の蓄積に伴ふ生産の増加は利潤を低下せしめ、利率低下が一定の程度を超える時は、蓄積は沮害される。此の時資本家階級は恐慌の激動を免れないのである。

要するに「資本の増加を支配する法則は、人口の増加を支配する法則と全く同様には明瞭でないけれども、併し兩者は確かに同じ種類のものである。……富を永続的に増加せしめんと目的から、資本の生産物に對する適當の需要のない時に、引續き収入を資本に轉化することは、恰も勞働に對する需要もなく勞働維持の基金の増加もなくして、引續き結婚と産兒を獎勵すると同様に、等しく無益である。」後の場合それは勞働者を窮乏と罪惡とに陥る、人口過剰となり、前の場合それは資本家の破産と勞働者の失業に導く生産過剰——恐慌となる。

四 分配動態論（一般的恐慌の否定）

富の増進を永続的に確保するためには、其の分量の増加のみならず同時に價値の増加を必要とする。分量の増加を左右する生産上の諸條件は、其れだけでは價値の増加を保證せず、従つて既に述べたる如く生産過剰——恐慌——に導かねばならぬ。然るに此の生産過剰を防ぎ得る價値の

増加は、分配——生産物の消費者への分配——に依存する。それ故に生産の行詰りを來すことな
く富の永續的増進を確保するためには、『生産力と分配手段との結合』を必要とする。これ彼れの
動態研究が、生産論と對立して分配論を論究する所以である。

彼れに従へば、『分配に依存する所の價値の増加にとつて最も有利な原因は、第一土地財産の
分割、第二内外の商業、第三不生産的消費者の維持これである。』²⁾以下是等の三原因と分配との
關係に就て彼れの所論を追及する。

第一、土地財産の分割

今日の問題としては寧ろ一般的に、財産の集中と分散とが商品分配上に如何なる影響を及すか
の問題なるが、封建的遺物の尙ほ殘存する當時に於て、土地財産の分割が特に問題とされたのは
寧ろ當然であらう。彼れは先づ第一に、財産集中は富の分配にとつて、従つて其の永續的増進に
とつて不利なることを主張する。封建制度に由來する土地の不公平なる分割が、中世に於ける富
の進歩の主要妨害なりしことを論じて、正當にも『少數者の過度な富は、有效需要に關しては、
多數者の適當な富に匹敵すべくもない』³⁾と斷じ、近世商工業の發展は、財産分割に伴ふ需要の擴
大の結果なると共に、又その原因となると言ふ。

『製造家及び商業家が彼等の商品に對する市場を發見し得るのは、單なる職人及び労働者層以上の多數消費者階級の中に於
てのみである。經驗の示す所によれば、製造業の富は財産のよりよき分割の結果なると同時に、社會の中等階級の割合を増す
ことによつて、かゝる分割を更に進展される原因である。』⁴⁾

第二に土地財産の過小なる分割も亦マルサスの排斥する所である。此點に關聯してフランスの

- 1) T. R. Malthus; Principles of Political Economy (1820). p. 413.
- 2) ibid., p. 427.
- 3) ibid., p. 431.
- 4) ibid., p. 431.

平等相續法の弊害を論じ、イギリスの長子相續法の廢止に反對して、「英國の國家は貴族なくしては維持できない。而して有能な貴族は長子相續法なくしては維持できない。」と主張し、彼れの地代論と論調を一にする。かくして彼れの説は結局に於て、財産の過大集中と過小分散との中間に於ける適當な比例を主張する所の中庸説又は均衡説に歸する。

『土地財産の分割、並びに工業及び商業資本の一定程度の分散は、富の増加にとつて最も重要であるといふことは眞理であるが、併も一定の程度を超えるならば、それは富の増進を妨げるであらうといふことも同じく眞理である……比較的小数の富める財産家を以つてしては、富の増進は有效需要の缺乏のために妨害せられ、小財産家の過多を以てしては……富の増進は供給力の缺如のために妨害される。經濟學に於ける富に關する總ての大きな結論は、比例に依存する……』⁷⁾

然らば今若し財産分割が中庸を得て適當な比例性を保つ場合には、富の増進は故障なく進行し得るか否か、彼れに従へば此の進行にも一定の限界があつて、『遂には其の反對原理に逢着し、生産力と衝突し始める。』⁸⁾即ち生産力の發展に伴ふ生産量の増加は、財産分割による需要の擴大によつて一應の解決を與へらるゝが、更に第二の『衝突』に當面する。此の衝突は彼れに従へば、商業の擴張殊に外國市場の開拓によつて解決されるのである。

『土地財産の分割は、富の分配に關する大手段の一であり、其の交換價値を維持し増進する傾向を有する……かくして惹き起された分配は、それが進展するに従つて富の上に更に有利な結果を引續き齎らすであらうが、遂に其の反對原理に逢着し、生産力と衝突し始める。これは主として内外商業の活動……に依存する所の諸事情に従つて、晚かれ早かれ起るであらう。』⁹⁾

第二、商業の擴張

5) *ibid.*, p. 582.
6) 補稿：『マルサスの地代論に就て(二)』參照。(經濟論叢第十七卷第五號、大正十二年十二月)
7) *ibid.*, p. 432.
8) *ibid.*, p. 439.

マルサスは先づ第一にフイジオクラートの所説に反對して、商業は商品の價值を増加することを主張する。彼れに於ける價值は交換價值であり、需給關係によつて決定せせらるゝものなるが故に、すでに一定の供給の存在する場合、その價值は需要側の事情に依存し、従つて需要の適合を計る商業は價值を増加せざるを得ない。即ち「一國に行はるゝあらゆる交換は、社會の欲望によりよく適合したる商品の分配を行ひ、従つて全生産物に對してより大なる市場價值を與へることを考へられる……若しも國內商業が國民生産物の價值を増加する傾向なしとすれば、其の商業は行はれないであらう。何となれば之に干與する商人が支拂を受けるのは、此の(價值)増加分からであるから。』⁹⁾

第二に商業は商品の價值を高めることによつて生産を刺激する。既に述べたる如くマルサスに於ては、價值は生産擴張の消極的動因であるのみならず、生産に對する積極的の調節者ともなる。「總ての種類の富の生産にとつて大なる刺激となるのみならず更に富が存在すべき形及び相對量の大きな調節者となるものは、此の價值である。如何なる種類の富と雖も、社會の一部が自然價格又は必要價格と等しき價值を其の上に認めるでなければ、永續的に市場に齎らさるゝことはできない。』¹¹⁾生産は言ふまでもなく利潤のためであり、利潤は彼れによれば價格に比例して増加するから、そこで「此の價格が上る時は生産は増加し、それが下る時は生産の増加は妨げられる」¹²⁾ことは殆んど自明であらう。要するに「國內商業によつて惹き起された商品の分配は、富及び資本の重大な増進に向ふ第一歩である。』¹³⁾

9) *ibid.*, p. 439.
10) *ibid.*, p. 582.
11) *ibid.*, p. 342.
12) *ibid.*, p. 583.
13) *ibid.*, p. 448.

第三に外國貿易も亦、同様に商品の價値を高め利潤を高むることによつて、生産の永續的擴張を保證する。すでに國內商業によつて富の進歩の限界に達した國民經濟も、外國市場の開拓によつて生産過剰を解決することが出来る。『外國貿易の結果は商品の分量を増加すると同時に、尙は一つの最も重要な結果を伴ふ……即ち交換價値量の増加である。此の後の結果は生産的産業に對して永續的な刺激を創造し、豊富な商品の供給を維持するためには極めて必要であるから、此の結果の起らない稀なる場合には、労働需要の沈滞が直ちに感せられ、富の進歩は妨害される。』¹⁴⁾要するに『外國貿易並びに總ての市場の擴張は、分配より起る價値増加にとつて極めて有利である。』¹⁵⁾考へねばならぬ。』¹⁶⁾彼れは是等の點に於ても亦、リカアドゥと對立する。

第三、不生産的消費者の必要、

分配上の三原因に於ける不生産的消費者の存在は、生産上の三原因に於ける資本蓄積と對立して、分配動態論に於ける最も注意すべき彼れの主張である。言ふまでもなく茲に謂ふ所の不生産的消費者とは不生産的労働者ではない。何となれば彼れに於ける資本の蓄積は、不生産的労働者の生産的労働者への轉化であり、資本の蓄積及び生産の増加は、今の場合議論の前提をなすからである。『それ故に其處には重要な消費者階級がなければならぬ。でなければ商人階級は彼等の業務を引續き擴張して其の利潤を實現することは出来ない。此の階級に於ては疑もなく地主が優越的地位を有する。』¹⁷⁾即ち地主の不生産的消費が先づ第一に存在の理由を認められる。

政治家・軍人・官公吏・自由職業家等々の不生産的消費者は、一國の存在を維持する上に不可缺

14) *ibid.*, p. 455.

15) *ibid.*, p. 585.

16) *ibid.*, p. 466.

17) 抽稿；前掲參照。

の要素をなす。たゞ問題は、是等の不生産的消費者の存在は、主として經濟外の理由より必要とせられ、従つて彼等の存在は其れだけ直接には其の國の經濟的消耗を意味するか、若くは『彼等は生産に對する新たな動機を提供し、一國の富をして、それなき場合に於けるよりも、より以上に進展させる傾を有するか否か』¹⁸⁾にある。

此の問題の解決は、彼れに従へば更に二つの問題に依存する。第一『蓄積の動機は、それが労働者の生活資料を得る困難のために妨げらるゝよりも遙か以前に、有效需要の缺乏によつて妨げられ又は絶滅されるか否か。』第二『此の如き過剰の「可能性」を認めたとしても、人類の實際の習慣の下に於て、それが起り得ると信すべき十分な理由があるか否か。』¹⁹⁾是である。此の中第一の問題は、既に資本蓄積論に於て、吾々の積極に解答し得たる所である。即ち資本の蓄積、生産の擴張は、それだけでは有效需要の缺乏によつて生産過剰に陥らざるを得なかつた。此の生産過剰の『可能性』が、實際の社會に於て果して『現實性』に轉化し得るかの第二の問題こそ、茲に當面の解決を待てるものである。

生産過剰の可能性は其の實現性に轉化し得るか否か？ 生産階級及び地主階級に關する限り、それは實際に起り得ると彼れは主張する。第一に生産的労働者に於ける消費の増加——生活の向上——は、社會多數人の幸福の見地からは兎も角、富に關する限りは、其の増進を刺激する所以ではない。何となれば彼れに従へば、『勞働階級の間』に於ける消費の大なる増加は、甚だしく生産費を高めねばならぬから、それは利潤を低下し、農工商が或る程度の繁榮に達する以前に、蓄積の動機を減退又は絶滅せねばならぬ。²⁰⁾更に又永久的には人口法則に支配されて、禁欲的習慣

18) *ibid.*, p. 477.19) *ibid.*, p. 478.20) *ibid.*, p. 478.21) *ibid.*, p. 473.

の盛なる場合を除き、勞働階級は其の消費生活を或程度以上に豊富にすることは出来ないからである。第二に生産資本家に關しては、其の消費を増加することは可能である。彼等は其の「能力」を有する。併し乍ら此の能力に應じて消費を増加することは、『資本家一般の實際の習慣と一致しない。』即ち彼等は消費能力があつても、其の「意思」を有しない。彼等の意思と習慣は、必ずや其の利潤の一部を蓄積せねばならぬ。此の如くして『生産資本家は十分に消費せんとする意思を有せず、生産勞働者は其の能力を有せず』とすれば、たとひ其處には地主階級の消費があつたとしても、是等總ての消費を以つてしても、増加したる生産を消化することは困難となる。即ちこれだけの範圍では、恐慌の可能性は現實化して來る。そこで是等の生産階級及び地主の外に、不生産的消費者の存在が要求される。即ち此の階級の存在は、『單に一國の統治・防衛・保健・教育にとつて必要なのみならず、また其の國の自然的資源を十分に發揮するために要する勤勞を喚起するに必要である。』²²⁾換言せば是等の不生産的消費者は政治上の存在理由のみならず、また經濟上の存在理由をも有する。吾々は茲でアダム・スミスに於ける政府の最小限度説を想起する。

さて不生産的消費者は彼れに於ては二つの範疇に分たれる。第一は僕婢・自由職業者の如く個人の私的支拂によつて生活するもの。此種の不生産階級は需要を喚起して『産業を刺激するに最も有益である』²³⁾のみならず、生産費を高める弊を伴はない。之に反して第二の不生産階級、即ち軍人・官公吏・公債所有者の如き公的支拂を受くるものにあつては、彼等が生産を刺激する點に於ては第一のものご異なるらぬけれども、彼等の生活資源たる國家の租税そのものは、工業に對しては生産費を高め、商業に對しては其の自由活動を妨ぐるために、此の點に於て其は富の増進を沮

22) *ibid.*, p. 465.

22a) *ibid.*, p. 587.

23) *ibid.*, p. 478.

害する。『従つて租税によつて支持さるゝ所の不生産的労働者階級の國富に及ばず影響は、國を異にするに従つて甚しく異ならねばならぬ。そして生産諸力と、各國に於ける租税の徴せらるゝ方法とに全く依存せねばならぬ』²⁴⁾。

此の如くして何れの範疇に屬するを問はず、不生産的消費の存在若くは増加を考ふる限り、生産過剰は其の現實性を失ふ。彼等の存在は需要の缺乏による生産の行詰りを打開するために絶對に必要である。然るに他方に於て不生産階級の存在は、直接にはそれ丈け富の消耗を意味するから、其の過大なる存在は、富の増進を沮害すること言ふ迄もない。茲に於て問題は、此の消耗階級と生産階級との割合如何でなければならぬ。『今若し不生産的労働が多きに過ぐるならば、市場に齎らさるゝ物質的生産物の比較的少量なるために、全生産物の價値は分量の少いために減少するであらう。また若し生産階級が多きに過ぐるならば、全生産物の價値は供給過多のために低下するであらう。最大の價値を生ずるのは、兩者間の一定の割合に存すること明らかである。』²⁵⁾吾々は茲にも彼れの均衡説に遭遇する。然るに此の兩者の適當なる割合を一般的に決定することは、彼れに従へば經濟學の成し得ざる所である。何となれば其は種々なる事情の變化に依存するからである。例へば土地の沃度の大きな國、又は生産的に有能な國民にあつては、然らざる國に於けるよりも、より多數の不生産的消費者を保有する可能と必要を有すべく、要するに自然的及び人的生産力の大小如何によりて決定さるべき問題であると言ふ。之を歴史的發展に就て見るならば、生産力の發展するに従つて、次第に生産階級の相對的減少と不生産階級の相對的增加を必要及び可能とする筈である。(未完)

24) *ibid.*, p. 479.25) *ibid.*, p. 480.26) *ibid.*, p. 489.